

十
と
一
の
物
語

その世界は果てしなく、どこまでも果てしなく広がっていました。

そしてまた、これほどにくっきりとした世界もありませんでした。ぼんやりとしたものは何もなく、すべてが力強く明媚な法則に満たされた世界でした。

光はあまねく満ちあふれ、影もなく、宇宙を秘密めいて覆う青空の青もなく、謎が姿を隠す場所などどこにもないような世界だったのです。

その世界には、2種類のものたちが二つに分かれて生きていました。

かりに、そのものたちを、十と一と呼ぶことにしましょう。そうすると、その世界を言い表すのがずいぶんと楽になるからです。

そうなのです。その世界の片側には数え切れないほどの十が、その反対側には数え切れないほどの一が生きていたのです。

その世界の真ん中には、十と一が出会うことのできる、波打ち際のような場所がありました。

十から見ると、いわば自分たちが陸で、一は波打ち際から彼方に向かって広がる海のようなものでした。

一方の一から見ると、やはり自分たちが陸で、十が波打ち際から彼方に向かって広がる海のようなものでした。

あるいはこんなふうに言いかえてもいいでしょう。

その世界は無限に向かって伸び続ける国境によって、十の国と一の国に分かれています。

しかし、その国境は生き物のように常にうねうねと波打っていましたから、やはり、波打ち際と呼んだほうがよいのかもしれませんが。

十も一も、お互いに似たものどうしでした。違うのはただ一つ、十は十で、一は一だということ。十は一になることができず、一は十になることができませんでした。二つの間には完全な違いとでもいうべきものが横たわっているのです。

でも、境遇はともよく似ていました。

どちらも、自分たちがいつからここに生き、そしていつまで生きなければならないのか、まったく知りませんでした。誰も生まれることがなく、そして、誰も死ぬことがなかったからでした。そういう意味では、この世界に存在しないものとは、始まりと終わりであると言ふことができました。ただひとつの例外を除いては……。

波打ち際で十と一はいつも憧れに満ちて見つめ合っていました。

彼らには、私たち人間の目に似た器官はありませんでしたが、それは、やはり「見る」としか言いようのない知覚でした。彼らはその知覚を通じて、互いを「完璧に見つめる」のでした。

一は十の持たないものをすべて持ち、十は一の持たないものをすべて持っていました。しかしそれは、互いが正反対の性質を持っていたという意味ではありません。

それは、言ってみれば、この世でもっとも完璧なシンメトリーであり、もっとも無駄のないツガイでした。

彼らの世界には美という概念はありませんでしたが、おそらく、十には一が、一には十が、この世のものとは思えないほどの美しさに輝いて見えたのではないのでしょうか。絶対的な美というものがあるとしたら、まさに、互いが互いにとってそうであったはずです。

だから、十たちは波打ち際にやってきては、飽きることなく、一を見つめ続けました。もちろん、一たちも波打ち際にやってきては、飽くことなく十を見つめ続けたのです。

しかし、十と一は、ただ見つめ合うだけで、それ以上のことが起きることは決してありませんでした。近寄ることもなく、ましてや触れあうことなど思いもよらぬことだったのです。

すでに気がついた読者もいることでしょう、わたしが十と一にたとえたそのわけに。つまり、わたしたち人間の世界では十と一が出会えばゼロとなるのですから。

波打ち際は不思議な力に満たされた場所でした。そこに行き、互いに互いを遠くに認めた瞬間から、その不思議な力を誰もがただちに感じるできませんでした。

あらがいがたく、甘美な力でした。それなのに、ときには邪悪にも思われ、破壊と破滅がそこから匂い立つようにも思われました。運命というものが物理的な力だとしたら、まさにこの波打ち際に充満している力こそ、運命と呼ぶにふさわしいものでした。

十と一は、この運命の力にその身が引きずり込まれることのないよう、鋭敏な感覚によって繊細な距離を保ち、互いに見つめ合いました。

やがて見ることに、見られることに疲れ果て、運命に逆らって立ちつくす力をも失いかけると、ゆっくりときびすを返し、互いの大陸の奥深くに漂い戻って行くのです。もし彼らに私たち人間と同じような呼吸器があったなら、おそらくこれ以上なく深いため息が生み出す風と音とで、波打ち際には嵐のような混乱がたえず生起していたことでしょう。

大陸の奥深くにはその不思議な力の余韻もなく、ただ静謐だけがありました。それは眠りというべきものでした。

奥深くに近づくにつれ、それぞれは個性というものを失っていくのです。十はますます十らしく、一はますます一らしく、その姿を整え、みるみるうちに誰が誰だかわからなくなっていくのです。

そしてついにその違いがまったく失せてしまうと、彼らは静謐のただ中に、つまり、眠りに陥るのです。それは気絶や卒倒、昏倒というものに近い、深い眠りでした。

彼らをその眠りから覚ますものは、音でもなく、風でもなく、ましてや十分な眠りそのものですらなく、それはただの偶然によるのでした。彼らは偶然に目ざめ、そして不思議な力の記憶に（それはほんとうは記憶などではなく、微弱な力線なのかもしれません）いざなわれるようにして波打ち際に向かい、そこに憧れとともにたたずみ、そして憧れることに疲れはててしまうと、再び眠りへと戻っていくのです。

その世界は、始まりの予感に満ちあふれてはいても、決して何一つ始まらない世界でした。波打ち際の不思議な力は、始まりの力であると同時に、抑制の力でもあったのです。

この世界にも時は存在していました。ただ、わたしたち人間が知っている時間とは、わずかに異なっていました。時が一つの方向にだけ流れていくということでは同じでしたが、昼も夜もなく、生も死もなく、ただ疲弊の果ての必然の眠りと、偶然の目ざめだけがあるこの世界では、誰も時を数えることを知らず、また、数えようもなかったのです。

そんなわけですから、そこは物語が生まれることのない世界であり、作家はその世界を

素描することしかできないのです。

しかし、時に、唐突に物語は生まれるのです。

偶然によって、つまりある確率によって、一人の十が目ざめました。ほぼ同じ頃に、一人のーもまた目を覚ましました。

十もーも、目ざめた直後は、ツルリとした、個性のない姿でした。

十もーも眠る前の記憶をおおかた失っていました。

すぐに、憧れの記憶だけが、いや憧れそのものだけが、ぼんやりとその輪郭を明らかにし始めていきました。

十もーも、その憧れと自分自身との違いがなくなるほどに浸透しあうと、まるで冬の渡り鳥が南を目指すように、あの波打ち際に向かって漂い始めたのでした。

もちろん、十もーも、波打ち際のことはずっかり忘れていました。それでも、それがもうひとつの時間の流れであるようにして、必然として波打ち際へと近づくのであり、または引き寄せられていったのでした。

それは少なからぬ時を要する旅でした。

その旅を通して、ツルリとした姿は、やがて様々な色を帯び、そして凹凸を刻み、歪んでいきました。そのことによって、十も一にも、自意識とでも言うべきものが生まれ、ある独特な方法で、十は十どうしで、一は一どうしで語り合うようになるのです。

ここから、この一人の十と、一人の一について、他の数多の十と一と区別するために、新たな名を付そうと思います。

この十は $\langle + \rangle$ 、一は $\langle - \rangle$ と、括弧でくくって呼ぶことにしましょう。

さて、 $\langle + \rangle$ や $\langle - \rangle$ のように波打ち際に行くものたちと、波打ち際から戻るものたちとで、そのうちにあたりはにぎやかになっていきました。それは、互い違いに流れ、交叉する雲や川のような、不思議な光景でした。上流も下流もなく、一つの河床を双方向に流れていく、あり得ぬ大河のようなものです。

$\langle + \rangle$ は旅をとにもする多くの十たちと、自分たちが向かう波打ち際についての、ゆっくりと形になっていく忘れたはずの思い出を、言葉ならぬ言葉で交換しながら、若武者のようにわき目もふらず、前へ前へと流れていきました。それは $\langle - \rangle$ も同様でした。

前方から夥しい数の、波打ち際から戻ってくるものたちが迫り来ては、傍らを通りすぎ
ていきます。

まるで、憧れが乾き、凝固して目に見えぬ破片となり、次々とはがれ落ちてでもいくよ
うに、その凸凹で歪んだ醜さが彼らから少しづつゆっくりと消えていくのがわかりました。
彼らは憧れを忘れ去ることで眠りに入る準備をするのですが、見方を変えれば、奥深く
へ近づけば近づくほど、彼らから記憶がはぎ取られていき、静謐さだけが残るのだとも言
えるのでした。

〈十〉も〈一〉も、そうやって自らの後方へと流れ去っていく仲間たちを見るうちに、
こんどは恐れというものが内に目覚め始めるのを知るのでした。その恐れは、身がすくむ
恐怖や逃げ出したくなる不安とは異なる、寄る辺ない清涼さを伴う、一種の透明度のよう
なものでした。たとえば、落下する液体――雨や雫だけが知ることのできる恐れとでもいっ
たらよいのでしょうか。

他の十や一たちも同様で、ぽたりと額に落ちた一滴のような恐れとともに、彼らはます
ます速度を増して波打ち際へと流れていくのでした。

今までは小舟を運ぶ流れのように穏やかだった不思議な力が、荒縄のようにまとわりついて我が身を引っ張るのをはつきりと感じ取れるようになる、旅も半ばを過ぎ、いよいよ波打ち際が視界に入ろうかという距離まで近づいたということです。

〈十〉も、旅をともにしてきた仲間たちも、それを本能的に察します。

〈十〉とまったく反対の側から波打ち際に向かって滑るように向かっているへへ〜とその仲間たちにとっても、状況はまったく同様でした。それはたとえば、波打ち際に沿って立てた巨大な鏡に映る自分たちを見ているようなもので、ただ向きだけが異なり、あとはすべてへへ〜たちに起きたことはすべてへへ〜に起き、へへ〜に起きたことはすべてへへ〜にほぼ同じ瞬間に起きていたのでした。

その点では、目覚めは偶然にりましたが、眠りから覚めた後は厳格な必然が彼らの生を支配していたともいえるでしょう。わたしたち人間も似たようなものかもしれませんが、彼らの世界には星辰が存在しない分、その必然は剥き出しの裸のようであったのです。

同じように必然の獄に生きるわたしたち人間がなお無邪気に自由を口にするように、彼らにも自由に似た観念がありました。

彼らの世界には「落下」という現象はありませんでした。わたしたち人間が重力という

絶対的な力によって縛められているような、垂線への服従とは彼らは無縁だったので。彼らは自在に上昇でき、自在に下降できました。鳥のように、風のように。しかし、その運動が彼らの自由だなどというつもりはありません。その運動の必然もまた当の必然によって目隠しされているからです。では、彼らが自由と感ずるものとはなんだったのでしょうか。

彼らの自由とは、波打ち際に向かう自身の内なる充足にありました。

恐れを感じつつも、波打ち際へ向かうためにもっとも効率的な飛行をする自分自身が必然そのものであることに充足を感じ、同時にそれを自由の賜物ととらえていたのです。もちろん、彼らにわたしたち人間の言葉の「自由」と一対一に対応する言葉はありませんから、あくまでも、人間の自由に対応する似たものを彼らの世界に求めれば、の話でありませんが。

さて、漸うのこと、帰還するものたちに道を譲ろうとへ＋＼たちが上昇するたびに、その視界の下方に波打ち際がせり上がってくるようになりました。下降すると数多の十たちの姿の向こうに波打ち際はその巨大な姿を隠してしまいましたが、上昇することに、せり上

がる波打ち際の偉容が着実に自分たちに向かって迫り来るのがわかりました。

波打ち際には、また別の類の静謐がありましたから、それは遠くからでもはっきりと認めることができました。それは眠りの静けさではなく、忘我と畏怖の静けさともいうべきものでした。

視界の手前は大河を無限本束ねたような、広大な流れであるのが、上昇のたびに認められる波打ち際は、そこだけが横真一文字に凍てついた地平線か、鏡のように凧いだ水平線のようにでした。

その茫漠とした一帯は、 $\langle + \rangle$ や $\langle - \rangle$ たちを引き寄せる力とは異なる、別種の力によって統べられているように見えました。が、実際、それは正しく、波打ち際からは2種類の力が伝わっているのです。

第一の力は、わたしたち人間の世界のゴムに似ています。ゴムは引っ張れば引っ張るほど力が強くなります。つまり、辺境にあればあるほどその力は強く、力の源に近づけば近づくほど力は弱まり、その源ではついに力はゼロとなるのです。この力が $\langle + \rangle$ や $\langle - \rangle$ たちを波打ち際に引き寄せているのです。その最大値は、旅路の半ばあたりにありますから、帰還するものたちは、波打ち際から離れれば離れるほど、自分たちを引き戻そうとす

る魔力がより強大になっていくように感ずることでしょう。

もうひとつの力、第二の力は、磁力に似ています。つまり、力の源に近づけば近づくほど、その力は強大となり、その源ではまさに無限大の強さとなるのです。これこそが、波打ち際にて働いている力であり、たちこめる恐れの由なのです。

その二つの力にへ＋＼たち、へー＼たちは従順です。

さて、あなたは果たして彼らに心はあるのかと訝しげに思っているかもしれません。彼らは、シャボン玉のように外からの力によって漂っているのみで、主体などというべきものはないのだと。わたしが言葉によってそのシャボン玉を擬人化しているだけなのだ。

ここで断固として述べておきます。彼らには心があります。私たちに意識があるように、動物や植物に意識があるように、そして鉱物に意識があるように、彼らは確かに意識を持ち、そして主体というべきものを備えているのです。これは決して言葉によるまやかしではありません。

にもかかわらず、あなたが、あなた自身は自由意志というものを持ち、それがゆえに彼らより自由であり、いかに彼らが私たち人間の理解を超えたものたちだとしても、彼らには主体なるものは存在しないとあくまでも言い続けるのなら、これだけを指摘しておきた

いと思えます。

あなたは真に自由意志を持っているのでしょうか？ あなたは、あらゆる外的な力から自由であるでしょうか？ あなたは、ただ一つのことだけを意志して考え続けることすら、たった2分も続かないのに……。

〈十〉たちも、〈一〉たちも、第一の力が弱まっていくのを感じていました。

やがて己が働きに満足して寝入ったかのように第一の力が姿を隠すと、そこは第二の力もいまだか弱いままの力の空白地であり、たどりついた彼らは言いしれぬ幸福感にみたされていきます。

彼らが波打ち際へと向かうその速度は、舞い降りる白鳥らに似たある種の優雅さを帯びて減じていきました。

旅も終わりに近づきました。

前方には無数の十がひしめき、進むもの、帰還するものの交錯は、そこでは穏やかにゆっくりとなされており、それはまさに波打ち際の波のように、あるリズムにのっとなって出入りが繰り返されていました。

〈十〉たちは、我が身に及ぶ第二の力の影を感じることができました。それは甘い力です。

なおも波打ち際に微風のように近づいていくと、最初はかすかな衝動のようであった第二の力は、しだいに抑えがたい憧れとして〈十〉たちを虜にし始めました。反対側にいる〈一〉たちも、まったく同様でした。

そしていよいよ、しかし唐突に、〈十〉は波打ち際に立ったのです。

引き返す一人の十とすれ違い、また一人の十に道を譲るために下降したときでした。〈十〉の前にはすでに一人の十もおらず、突然に視界が開けたのでした。

前方には十たちではなく、無数の一たちがこちらを見つめつつ立ちつくしていました。

それは、この世界でもっとも美しい光景でした。

波打ち際に立った〈一〉にとってもそれは同様でした。前方に群れをなす十たちは、まさに美そのものでした。

その時、〈十〉の、そして〈一〉の内面の奥深くから、幾重にも重なり浸透しあった巨

大な織物のような記憶がせり上がるのが感じられました。それは神々しい腐臭ともいうべき匂いをもなっているように思われました。

その記憶とはとりもおさず、過去に無限回なされたこの憧れそのものである邂逅の、その無限層の重ね絵でした。どれが何回目の邂逅だったかなど問うことすら不可能な、永遠まであと一息の、長い時の堆積でした。

波打ち際までの旅路のあいだ、それは正午の影のように、足元に小さな翳りを作り出すだけの思い出であったものが、今や、巨大な闇となってへ＋＼、そしてへー＼の背後に黒々と重々しく延びていくようでした。

記憶の織物は眼前の美を際立たせることはあっても、それを徒勞と感じさせる否定的なものとはなりえませんでした。かつて無限回の邂逅を繰り返したにもかかわらず、さらに無限回の邂逅を欲望させるほどに、その美は絶対的だったのです。

まさに互いに輝きあい、惹かれ、胸をふるわせました。その憧れは、波打ち際の境界へと彼らを引き寄せる第二の力とあいまって、より苛烈な炎のように高まっています。

しかし同時に、本能的に未知なる破滅を予知した彼らの肉体は、第二の力に抗して、己が体に宿る第三の力をふるい始めるのです。

美へと引きずり込もうという第二の力と、存在にとっての安全な間合いをとろうという第三の力との、微妙な綱引きがすでに始まっています。

第三の力は己が存在から発せられているのですが、しかし、第一や第二の力と同様、それは機械的であり、盲目でありました。第二の力が磁力に似ているとすれば、第三の力は第二の力と極性が同じ磁力に似た作用をしていると言えるでしょう。ですから第二の力に抗するには多くのエネルギーを必要としましたが、しかしながら、第三の力が第二の力に屈することは決してありえないのです。それは反発する力であり、それは第二の力の淵源に近づけば近づくほど増大する力なのですから。

とはいえ、第二の力と第三の力は決して同種の力ではありません。力の働きは磁力に似ていますが、双方はまったく異なる類の力なのでした。不正確なたとえになりますが、それはいわば重力に対する揚力、あるいは重力に対する慣性みたいなものだといえるでしょうか。

〈十〉は焦がれて見つめ続けました。〈十〉の真正面には、〈一〉がいました。

憧れは、つかみかからんばかりの第二の力に誘われ、よりへーに近づきたい、触れたいという不穏な欲望にまでふくれあがっていきましたが、近づこうとすればするほど、まるで波打ち際に目に見えぬコロイドの壁があるかのように、第三の力がへ十を強い力で縛め、背後へと引き留めるのでした。

この第二の力と第三の力の拮抗は、苦悩そのものであり、感覚できる絶望でした。しかし、その第三の力こそが運命より逃れるために用意された、保護する母のような力なのです。そう、波打ち際こそは、現前する運命でありながら、逃れることが予定されている運命であり、決して飲み込まれることのない、ただ見られるだけの運命なのです。そしてその事態を作り上げる力が第三の力、母のような力なのです。

へ十の内面は、いや、存在そのものが、憧れと諦念の間でいまにも散り散りになりそうでした。目の前には、あと幾らかだけ歩み、体を差し出せば、確実に触れることができへーがおりました。へーと己を分かち合ふのわずかな間隙は、狂おしい空虚となつてへ十に激しい苦しみを与え続けました。それは、一方のへーにとつてもまったく同様のことでした。

この憧れは、約束された幸福とはまったく異なるものでした。ただ憧れるのです。その

果てに待ち受けるものなど想像だにせず、ひたすらに憧れるのです。美しい弦楽の最終音のフェルマータのあとには「無」が待ち受けるように、憧れは音楽そのもののように自足して、その外部に漏れ出ていくことがないのです。

第三の力が引き留めようとすればするほど、憧れはさらに燃えあがり、硬く、禍々しく、荒々しくなっていました。すると、ますます第三の力はその縛めを強め、〈十〉を波打ち際のこちら側に羽交い締めにするのです。

〈十〉はただ見つめ続けました。へーを憧れに満ちて見つめ続けました。絶望のロープに体をギリギリと縛り上げられながらも。

己の疲弊が感じ取れました。このまま内なる第三の力に抗することがやがて不可能になるだろうことが予測できました。それでも、〈十〉はへーを見ることをやめませんでした。へーもまた、〈十〉を見つめ続けました。

近づき、触れ、一体となりたいという欲望の虜となり、そしてそれが決して実現されないことの絶望の下僕となり――。

その時唐突に、〈十〉は思考したのです。

懂れているのは誰か？ と。懂れているのは〈わたし〉か？ と。懂れこそが時を時たらしめるのではあるまいか？ と。永遠の向こう側には何があるのか？ と。それにしても〈わたし〉は存在しているのか？ と。〈わたし〉は〈わたし〉であったことがあったであろうか？ と。この瞬間、〈わたし〉は〈わたし〉であろうか？ と。

すると、〈十〉の心に、金箔のようなものが、わずかに、わずかに生じました。神のようなものが、それをすかさずかすめ取り、神のようなものはそのちっぽけな光を腹に収めました。

すると、その神のようなものが、そつと寝返りを打ったようでした。そのこと自体に意味はありませんでした。〈十〉の思考とは何の因果ももたない、ただの〈動き〉でした。しかしそれは〈十〉たちの世界の外部Ⅱ上位での幽かな異変となりました。その幽かな異変は〈十〉たち、へーたちの世界に伝播して降り立ち、それは第一の力の微弱な乱れとなつて一瞬間、特異点として顕現したのでした。

この特異点による乱れはやがて増幅され、波打ち際と大陸の深奥とを行き交う無数の私たち、一たちに地震に似た動揺を引き起こしました。それは波紋のように彼らの世界を高

速で伝わっていきました。

〈十〉は波打ち際が突然にさざ波立つように揺れるのを見ました。それはあり得ぬこと、必然への冒涇でした。私たちが人間の世界で言えば、たとえば何の前触れもなく人が宙に浮くようなものです。背後の十たちが返す波のように己に向かって来るのも感じ取れました。目の前の〈一〉にも同様の波乱が生じていました。その奇跡と見まごう不規則性に〈十〉が憧れを手放した途端、〈十〉の体を背後の大勢の十が波打ち際のほうへと強く押し出しました。

ものを思う間もなく、〈十〉の視界いっぱいには〈一〉の美があふれ、一瞬の後に、取り戻した強烈な憧れの爆発とともに、〈十〉は〈一〉に触れたのでした。

〈十〉と〈一〉が合一したその刹那、二人はささやかでありながらもこの上なくまばゆい光と化し、たちまちに消え失せました。

〈十〉はどこに行っただのか？ 〈一〉はどこに行っただのか？ もちろん、その光景を目撃した少数の十たち、一たちの誰もがその答を見出すことはなく、ひたすらに恐れおののきながらも、力の乱れもすぐに終息した波打ち際で、なおも憧れずにはおれず、互いに互いを見つめ続けたのでした。

さて、この「+」と「-」が合一して消え去ったその刹那、+と-の両大陸の、そのそれぞれ最深部で、一人の+と、一人の-が虚無から現れました。それを誕生というべきか、出現というべきか、誰にもわかりませんし、また、深い深い眠りのただ中にいるものたちの間に起こった出来事でしたから、誰一人としてその出現を目撃したものもいなかったのです。

しかも、出現した当の+と-も、初めから深い眠りに捕らわれたままでしたから、自らのことを自ら知ることもなかったのです。己が何ものなのかも、どこから来たのかも、その+と-は、あの合一して消え去った「+」と「-」の輪廻した姿か？ とあなたは問うかもしれませんが、その質問は無意味であると言っておきましょう。なぜなら、出現した+と-にはアイデンティティと呼ぶべきものが、その位置情報以外にはいまだ皆無だったからです。

(太田穰)